トマス・ド・クインシー著作集 全四巻

刊行のことば

十九世紀イギリス・ロマン派の多士済々のなかで、特異な散文家として独自の光輝を放ち、『人工楽園』のボードレールや『異端審問』のボルヘスらに絶大な影響を与えたトマス・ド・クインシーは、わが国にあっても、谷崎潤一郎訳の「芸術の一種として見たる殺人について」、辻潤訳の「阿片溺愛者の告白」、佐藤春夫による「尼僧剣客伝」の原著者として夙に令名を馳せておりました。

博大多方面にわたるこの不世出の文人の主要著作を集大成しようとする試みは、かつて七〇年代半ばに牧神社により、全六巻からなる「トマス・ド・クインシー作品集成」として企画されました。しかし書肆の解散とともに、同集成は残念ながら結局一巻たりとも日の目を見ることなく、南柯の夢と終りました。その後、小社では、牧神社版の責任編纂者であった由良君美先生の御協力を得て、前「集成」を引き継ぐ形でのド・クインシー作品集の刊行準備に着手いたしました。しかしながら、直後に由良先生の御逝去にあい、編集作業は一時中断の止むなきに至っておりました。

体勢を新たにここにいよいよ刊行の運びとなりました『トマス・ド・クインシー著作集』は、由良先生御生前のプランに基づきながら、全四巻として纏めあげたものです。収録の作品は、若干の変更をのぞき、由良君美先生の選択になる事を、この場をかりて明記させて頂きます。

白玉楼の先生に感謝を捧げるとともに、どうか読者の皆様方の絶大なる御支援を賜わりますよう願ってやみません。

国書刊行会

刊行会

174 東京都板橋区志村二-二〇-五
電話〇三(五九七〇)七四二二/ファックス〇三(五九七〇)七四二七
国書刊行会

第二回配本・第Ⅰ巻 95年3月刊行予定

第二回配本・第Ⅱ巻 95年秋刊行予定

体裁—A5判・上製函入
平均予価—六八〇〇円
装幀—高麗隆彦

トマス・ド・クインシー著作集

トマス・ド・クインシー

トマス・ド・クインシー略年譜

一七八五年　織物輸入商トマス・クインシーとエリザベス・ペンソンの二男として、八月十五日、マンチェスターに生まれる。
一七九〇年　姉ジェーン死ぬ。
一七九二年　姉エリザベス死ぬ。
一七九三年　父死ぬ。
一八〇二年　グラマースクールから逃亡、北ウェールズとロンドンを放浪する。
一八〇三年　ワーズワスと文通をはじめる。オックスフォードのウスター・カレッジに入学。
一八〇四年　ときどき阿片を用いはじめる。チャールズ・ラムと会う。
一八〇七年　コウルリッジに会う。グラスミアにワーズワスを訪れる。
一八一七年　マーガレット・シンプソンと結婚。
一八二一年　ロンドン訪問。『英吉利阿片服用者の告白』を連載する。
一八二七年　『藝術の一分野として見た殺人』『イマーヌエル・カントの最期の日々』発表。
一八三三年　二度、借金で起訴され、債務者避難所に姿をくらます。
一八三四年　「サミュエル・テイラー・コウルリッジ」発表。以来一八四〇年まで、ワーズワス、ロバート・サウジーら湖水地方の詩人の思い出の記を断続的に掲載する。三度、債務不履行で起訴される。
一八三七年　『英国百科事典』のゲーテ、シラー、シェイクスピア、ポープの項を執筆。妻マーガレット死ぬ。二度、債務不履行で起訴される。
一八四五年　『深き淵よりの嘆息』を発表。
一八四九年　『イギリスの郵便馬車』を発表。
一八五〇年　『ド・クインシー著作集』（全二十巻、一八五六年完結）の刊行がはじまる。
一八五三年　ド・クインシーの著作改訂版、『真摯かつ陽気なる選集』（全十四巻、一八六〇年完結）の刊行開始。
一八五九年　十二月八日、エディンバラに死す。享年七十四歳。聖カスバート教会の墓地、愛妻マーガレットの傍らに埋葬される。

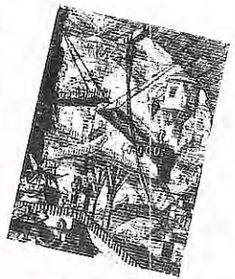
第I巻

英吉利阿片服用者の告白
野島秀勝訳

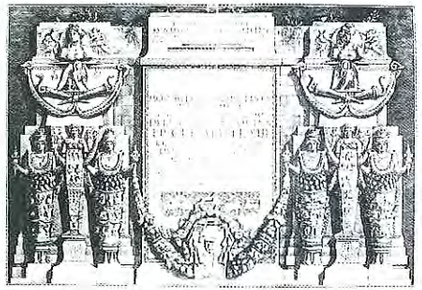
深き淵よりの嘆息
野島秀勝訳

藝術の一分野として見た殺人
鈴木　聡訳

「マクベス」劇中の門口のノックについて
小池　銑訳



美的想像力の友アヘンの特殊な力を用いて、人間の〈夢〉の崇高さを開示するために書かれたあまりにも著名な半自伝的作品『英吉利阿片服用者の告白』（初版。その続篇で、「レヴァナとわれらの悲しみの貴婦人たち」「ブロッケン山の幻影」等、数篇の変奏曲を含む『深き淵よりの嘆息』。悪徳の美学を定式化した、諧謔あふれる名エッセー『藝術の一分野として見た殺人』ほか。



第II巻

イギリスの郵便馬車
高松雄一・禎子訳

ジャンヌ・ダルク
中村健二訳

イマーヌエル・カントの最期の日々
鈴木　聡訳

異教の神託
宮川　雅訳

秘密結社
宮川　雅訳

イスカリオテのユダ
宮川　雅訳

ト籤と占星術
南條竹則訳

薔薇十字主義者とフリーメーソンの淵源に関する史的批判的研究
横山茂雄訳

駅伝馬車とナポレオン戦争の思い出がド・クインシーの内面に落とした光と影をめぐる壮麗な夢のフーガ『イギリスの郵便馬車』。ボルヘス、ペイター、シュオブらの〈想像の伝記〉の先駆的作品ともいうべき『イマーヌエル・カントの最期の日々』。他に、無類の博識と批評眼を披瀝する隠秘学関係のエッセーを収録。

ド・クインシーをまた読める幸福

荒俣　宏

トマス・ド・クインシーといえば、近年ではかれの作品を最も称揚してみせたのが、かの稲垣足穂や由良君美であったように、文学と哲学――いや、ひょっとすると科学までも――とを超横する文学者たちのアイドルであった。有名な『英吉利阿片服用者の告白』は、情報化社会が到来した現代にこそ熟読の意味があり、また『藝術の一分野として見た殺人』が近年の殺人事件報道のスタイルに衝撃を与えるだろうことは、当然予想されるのに、その全貌に接し得るコンパクトな著作集が刊行されぬうらみがあった。そうした情況がここに打破され、ド・クインシーのまさに総合データベースじみた著作が虚構の現代に復活することは、まことに喜ばしい。わたしはかれのような「酩酊した理性」にかぎりなく憧れる。

暗闇の解釈者

高橋康也

輝かしい詩で始まったロマン派の時代は、みずからについて語るための散文のスタイルを必要としていた。その走りはコウルリッジであったが、それを自在に変奏して、真に新しい、十九世紀的な散文の書き手となった栄光はド・クインシーのものだ。

その栄光は幼時以来の孤独と苦悩、阿片吸引の不安と恍惚に裏打ちされていた。ロマン派詩人たちの最良の肖像を描いた彼は、自身、近代文化のなかの芸術家の一典型であり、その最良の自画像作家でもあった。

意識の裏側の闇のなかで果てしなく繰り返される思い出と幻想を書き綴ったこの「暗闇の解釈者」に、ボードレールは深く惹かれた。コウルリッジとボードレールをつなぐ貴重な文人の魅力が、手だれの訳者たちによって今日に甦るのを期待しよう。

もう一つの出会い／解放

阿部良雄

ボードレール『人工天国』の阿片に関する部分は、「英吉利阿片服用者の告白」と「深き淵よりの嘆息」の解説つき翻案である。ポーの翻訳に傾注しつつあった詩人にとって、ド・クインシー体験とは、一つの解放に他ならなかった。詩の構築や小説の謎解きにおける論理の追求や、密室の稀薄な空気の中で胸を締めつけるヒステリックな興奮から脱して、パリの詩人は、しばし、感受性ゆたかな英国の青年とともに、ウェールズの野を、ロンドンの街頭をさまよう。「脱線」の詩学を媒介として、もう一つの「現代性」への展望。夢と、消えることなき記憶の重層とへ開かれる、深い視野。そして哀れな娘アンのエピソードは、「他者」との稀有な出会いの体験を通じて、逆説的にも「力の文学」の可能性を示唆するものではなかったろうか。

第III巻

悪魔の骰子
高山　宏訳

クロステルハイム
玉井　暲訳

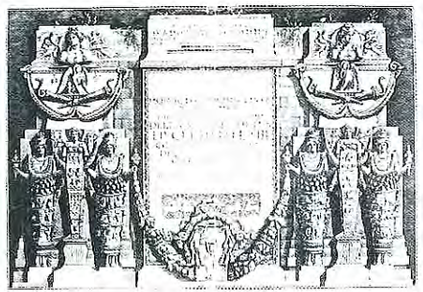
ハイチの王様
横山茂雄訳

復讐者
土岐恒二訳

エスパニア尼侠伝
南條竹則訳

韃靼人の反乱
土岐恒二訳

ゴシック・ロマンスからユーモア小説まで、多彩な物語小説6篇を収める。イギリス人とユダヤ人の間に生まれた憂鬱な美青年の回りに起こる凄惨で不可思議な殺戮の数々を描く『復讐者』。十七世紀のスペインを舞台に、修道院を抜け出した男装の麗人が波瀾万丈の冒険を繰りひろげる『エスパニア尼侠伝』ほか。



第IV巻

湖畔詩人の思い出
藤巻　明訳

ウィリアム・ワーズワス、サミュエル・テイラー・コウルリッジ、ロバート・サウジーら、ド・クインシーが親しく交わった英国ロマン派の文学者たちの批評として不動の地位を保つ高名な回想録。本書はまた彼らの暴露記事としても貴重な価置を持っている。付＝ド・クインシー小伝（富士川義之）

訳題等、一部変わる可能性があります。